

幼児理解からはじまる

保育・幼児教育方法

〔第2版〕

編集・著 | 小田 豊・中坪史典

編集協力・著 | 上田敏丈・岡田たつみ・奥山優佳
香曾我部琢・中田(後藤)範子

著 | 池田隆英・石井章仁・高橋貴志
竹川慎哉・富田昌平・松浦浩樹
三浦正子・三井真紀・和田美香



建帛社
KENPAKUSHA

はじめに

保育実践の基盤は、保育者の幼児理解にあるといわれるように、保育者がその子をどう理解するのかによって、保育のありようは大きく異なります。たとえば、ダンゴ虫を探し回っている A 男の傍らに寄り添う保育者が、「彼はダンゴ虫の何に興味を示しているのか?」「なぜそれに興味を示すのか?」などを推理しながら、一緒にダンゴ虫を探しているとしましょう。この保育者のかかわりは、< A 男 > 理解に基づいた、彼の「今ここ」を援助する行為といえるでしょう。つまり保育者の幼児理解は、保育実践の出発点なのです。

本書は、将来保育者を目指す学生の方や、保育所・幼稚園に勤務する保育者の方を対象に、幼児理解にはじまる保育の援助と方法について提示するものです。従来、保育・幼児教育の方法に関する書籍の多くは、保育の形態や方法、行事、家庭・地域・小学校との連携などの解説に重点が置かれており、幼児理解に基づいた具体的な保育場面における保育者の援助の在り方については、必ずしも十分に扱われてこなかったように思います。

これに対して本書は、幼児理解を起点に、保育を計画（デザイン）し、実践し、省察することで、新たな幼児理解を再構成するという循環モデルを提示したところが特徴です（本書では、これを保育実践サイクルと名付けました）。本書は、次の 3 部構成で展開されています。第 1 部は、理論編（1～3 章）です。保育者の幼児理解と保育計画について解説します。第 2 部は、実践編（4～11 章）です。8 つの具体的な保育場面について、保育実践サイクルに基づいて解説します。第 3 部は、再び理論編（12～13 章）です。保育者の省察を促す方法としての記録とカンファレンスについて解説します。つまり本書は、保育の方法を Brush Up するための、「幼児理解→保育計画（デザイン）→保育実践→省察」の < 4 つの専門性 > の循環モデルが提示されているのです。

さあ、みなさん、早速本書を紐解いてみてください。そして幼児理解を起点とし、新たな幼児理解を再構成する保育実践の意味を読み解いてみようではありませんか。

最後になりましたが、本書の作成にあたっては、編集協力者として、上田敏丈氏、岡田たつみ氏、奥山優佳氏、香曾我部琢氏、中田（後藤）範子氏（50 音順）にご尽力を頂きました。本書の企画策定から原稿校正に至るまで、ML を通して活発な討論を展開してきました。また、建帛社の黒田聖一氏には、今回このような貴重な機会を与えて頂くとともに、編集の過程では、ML を通して適切なお助言を頂きました。ここに心より感謝申し上げます。

2009 年 12 月

小田 豊・中坪史典

第2版にあたって

2017年に「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改定（訂）されました。私達は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に向けた保育をどのように行えばよいのでしょうか。達成すべき学習目標が明示化される小学校教育においては、授業を計画し（Plan）、計画に沿って実践し（Do）、計画通りに実践されたかを確認し（Check）、改善することで（Action）、児童の学習状況や到達度を評価し、授業方法の改善に努めます。PDCAと呼ばれるマネジメント・サイクルを通して教師は、自らの授業方法を吟味するのです。

他方、幼児教育では、計画から出発し、実践、確認、改善するよりも、むしろ保育者の幼児理解から出発することを重視します。保育者が幼児を理解し（Understand）、そこから保育を計画・デザインし（Design）、実践し（Do）、省察することで（Reflection）、幼児理解を再構成するのです。

本書では、PDCAとは異なるマネジメント・サイクルを「4つの専門性」に基づいた「保育実践サイクル」（UDDR）として提案します。幼児のために、ともに歩む保育者について考える一助として本書をご活用いただけたら、編者・著者として喜びに堪えません。

2019年8月

小田 豊・中坪史典

もくじ

序章 はじめに 1

1. 保育の方法を Brush Up する<4つの専門性> ……………1
 - (1) 保育の方法って何だろう？ 1
 - (2) 保育の方法を支える「4つの専門性」って何だろう？ 2
 - (3) 「4つの専門性」の循環モデル 3
2. 各章のダイジェスト ……………4
 - (1) 幼児を理解し、保育を計画（デザイン）するとは？：〈理論編〉 4
 - (2) 保育を実践するとは？：〈実践編〉 5
 - (3) 保育を省察するとは？：〈理論編〉 6

1章 幼児理解と保育者の援助 7

1. 幼児理解とは ……………7
 - (1) 幼児理解と援助 7
 - (2) 一人一人の<その子>理解へ 8
 - (3) 自分が思い描く<その子>像 8
2. <その子>理解のプロセス ……………9
 - (1) <その子>を理解する手立て 9
 - (2) 新しくなり続ける<その子>理解 11
3. 振り返ることにより新しくなる<その子>理解 …………… 13

2章 保育の計画(カリキュラム・デザイン)と環境構成 15

1. 保育の計画を立てることの意味 …………… 15
 - (1) はじめに 15
 - (2) 計画的に保育を行う幼稚園・保育所・認定こども園 16
 - (3) 遊びの指導を計画的に行うこと 16

2. 保育の計画の特徴 - 幼児理解に基づく保育計画 -	18
(1) 「計画を立てる」ということ	18
(2) 保育記録を書くということ	19
(3) 保育記録と保育の計画	19
3. 保育の計画と環境構成	21
(1) 自らの保育を「見る」機会の保障	21
(2) 計画的な環境構成と保育の日常への意味付け	21
(3) 計画的な環境構成と保育の計画性の明確化	22

3章 幼児の遊びと発達 23

1. 遊びの定義と分類	23
(1) 人間はどのように遊ぶのか	23
(2) 遊びとはいったい何か	24
2. 遊びと発達	25
(1) 遊びを通して何が発達するのか	25
(2) 遊びの面白さを探究すること	26
3. 子どもの発達に伴う遊びの展開	27
(1) いないないばあ遊び	27
(2) かくれ遊びからマテマテ遊びへ	28
(3) 追いかけて遊びから鬼ごっこへ	29

4章 登降園場面における保育者の援助と保護者対応 33

1. 登降園場面における保育者の援助と保護者対応の基本的な考え方 ..	33
(1) 登園場面の基本的な事柄と保育者の援助	33
(2) 降園場面の基本的な事柄と保育者の援助	35
(3) 登降園場面での保護者対応の考え方	35
2. 幼児理解からはじまる「登降園場面」での事例	38
(1) 登園場面の事例（保育所 4歳児男児 4月）	38
(2) 降園場面の事例（保育所 5歳児男児 6月）	40
3. まとめ	41
(1) その子の生活全体から理解への方法を探る	41

- (2) 登園時も降園時も，前日や翌日との繋がりを大切に考える 41
- (3) 保育者の専門性は，幼児一人一人に作用する 42

5章 幼児の遊びの発展と保育者の援助 43

- 1. 遊びの発展と保育者 43
 - (1) 「遊びの発展」と「援助」とは何か 43
 - (2) 遊びにみられる「思考力の芽生え」と「知的好奇心」 44
- 2. 幼児理解からはじまる「遊びの発展」 46
 - (1) 保育実践サイクル 46
 - (2) 実践事例から 48
- 3. まとめ 49

6章 協同する経験と保育者の援助 51

- 1. 保育における協同する経験と学び 51
 - (1) 協同する経験とは 51
 - (2) 協同する経験を支える保育者の省察 52
- 2. 省察に基づく協同する経験 53
 - (1) 遊びの行き詰まりを省察する 53
 - (2) 協同する経験と保育者の援助 58

7章 幼児同士のトラブルと保育者の援助 59

- 1. 幼児のトラブルを読み解く保育者のまなざし 59
 - (1) トラブルの原因はどこにあるのか 59
 - (2) 幼児理解のまなざしを転換する - 異質との交わりの欠如 - 60
- 2. 幼児同士のトラブルに対する保育者の援助 61
 - (1) 日本の事例 61
 - (2) 海外での実践事例 - オーストラリアの場合 - 64
- 3. まとめ 66
 - (1) 幼児同士のトラブルに対応する保育者の専門的知識とスキル 66

8章 食育に関する活動と保育者の援助 69

1. 食育の意義と現状 …………… 69
2. 保育における食育 …………… 69
 - (1) 幼稚園教育要領, 保育所保育指針, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に見られる食育に関する記述 69
 - (2) 幼児の孤食と共食 70
 - (3) 保育所における食育に関する指針 71
 - (4) 発達過程に応じた幼児の食育 72
3. 食育に関連した保育実践例 …………… 72
 - (1) 行事に関連した保育実践サイクル 72
 - (2) 幼児の実態の理解からはじまる保育実践サイクル 74
4. まとめ …………… 76
 - (1) 食育における「行事と関連した保育実践サイクル」と「幼児の実態の理解からはじまる保育実践サイクル」 76
 - (2) 食育における保育実践サイクル 77

9章 「障害児」への理解と援助の方法 79

1. 「障害」についての基礎的理解 …………… 79
 - (1) 「障害」への意味付け 79
 - (2) 「障害」の分類 80
 - (3) 「障害」の特徴 81
2. 「障害児」の理解と援助の方法（事例紹介） …………… 82
 - (1) 複数の障害をもつタケルくん 82
 - (2) 入園から1年間の軌跡 83
 - (3) タケルくんへの理解と援助－排泄指導・着脱練習を例に－ 84
3. 事例にみる理解と援助の基本的な枠組み …………… 87
 - (1) 保育実践は複数の軸に沿って進行する 88
 - (2) 理解と援助には2つの枠組みが必要である 88
 - (3) 可能性を閉ざさない・自分だけで抱えない 89
4. 事例を発展的にとらえるために …………… 89
 - (1) 「障害」への関係論的アプローチ 89

- (2) 臨床的な保育実践の「前提」 90

10章 連続性を踏まえた保育と保育者の援助 91

1. 保育者に求められる「学びと生活の連続性」とは…………… 91
 - (1) 幼稚園教育要領における「連続性」とは 91
 - (2) 「連続性」が確保された保育実践とは 92
2. 「連続性」を踏まえた保育実践とは…………… 94
 - (1) 保育実践の紹介 94
3. まとめ…………… 97
 - (1) 保育における「連続性」を踏まえるために 97
 - (2) 最後に 98

11章 家庭との連携と保育者の援助 101

1. 家庭との連携とは……………101
 - (1) 保育者の“幼児理解”からはじまる「家庭との連携」 101
 - 『幼稚園教育指導資料第2集』より -
 - (2) 「家庭との連携」と「保護者に対する子育て支援」 102
 - 『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』より -
2. 幼児理解からはじまる「家庭との連携」の実際……………104
 - (1) 幼児の実態と保育者の幼児理解 104
 - (2) 保育の実際と家庭との連携 105
 - (3) その後のA子と保護者 107
 - (4) 実践事例から見えてきたこと 110
3. まとめ……………110

12章 保育者の省察を促すための保育記録 111

1. 保育における記録の意義……………111
2. 記録の様々な方法……………113
 - (1) 日常的な保育の記録 113
 - (2) エピソード記録 113

- (3) 映像による記録 114
- (4) ポートフォリオ・ドキュメンテーション 115
- (5) 計画についての評価の記録 115
- 3. 記録の内容 116
- 4. 記録を用いた評価・研修 117
 - (1) 記録から取り出して評価を行う 117
 - (2) 記録を生かした研修を行う 118
 - (3) 改善に生かすための記録作成の留意点, 自己評価・外部評価との関連 119
- 5. まとめ 120

13章 保育者の省察とカンファレンス 121

- 1. 「省察」と「カンファレンス」 121
 - (1) 省察とは何か? 121
 - (2) カンファレンスとは何か? 123
- 2. 個人の省察 124
 - (1) 日々の保育を振り返る 124
 - (2) メンタリングによる学び 125
 - (3) まとめ-省察とは展開可能性を考察すること- 126
- 3. 共同の省察 126
 - (1) 同僚性とは? 126
 - (2) カンファレンスでの共同の省察 127
 - (3) まとめ-必要なのは保育を批評すること- 128

終章 おわりに 129

- 1. 「PDCA サイクル」 V.S. 「保育実践サイクル」 129
 - (1) 「PDCA サイクル」は保育の方法のBrush Upに繋がるのか? 129
 - (2) 「計画」を起点とした保育実践 V.S. 「幼児理解」を起点とした保育実践 129
 - (3) 目標達成のための改善 V.S. 幼児理解の再構成のための省察 130

- 索引 131

序章

はじめに

- ▶ 「保育実践サイクル」の循環モデルについて学ぶ
- ・ 保育の方法を Brush Up する〈4つの専門性〉って何だろう
- ・ 〈4つの専門性〉の循環モデルって何だろう

1. 保育の方法を Brush Up する 〈4つの専門性〉

(1) 保育の方法って何だろう？

アメリカテネシー州の研究は、保育経験が「10年以上」と「10年未満」の保育者に育てられた子どもを比べたとき、前者の子どもの方が後者の子どもよりも、27歳になったときに約1,104米ドル（約12万5,000円）ほど年収が高いという結果を報告した¹⁾。どちらの保育者に育てられた子どもも、読解力や数学の成績などの発達に差は見られなかったが（中学校2年生時点）、「10年以上の保育者に育てられた子ども」の方が、他者とうまくやっていく能力、肯定的態度、しつけられていることなどが培われており、その差が社会人になってからの職場での働きぶりに影響を与え、年収の差となって現れるというのである。この結果を踏まえると、保育者の経験年数に裏打ちされた専門性豊かな保育の方法は、協調性、意欲、自信、忍耐力、注意深さなどの面において、長期にわたって子どもの発達に影響を与え、その後の人生に好循環を生み出すようである。

このテキストで扱う「保育の方法」とは、子どもとのかかわりや、子どもの育ちを援助する方法など、子どもの健やかな育ちを保障するための保育のあり方について様々な角度から学ぶものである。ところで、読者の方は、「保育の方法」という言葉から、どのようなイメージを想像するだろうか。例えば、「ピアノを弾く」「手遊びをする」「絵本や紙芝居を読み聞かせる」などの“スキル”のようなものだろうか。それとも「指導案の書き方」「保育計画の立て方」「クラス便りの書き方」などの“ノウハウ”のようなものだろうか。それとも子どもの発達を

見通した上で、「この時期になったらこれを指導する」「こういうときは、このように対処する」など、保育者の“ワザ”のようなものだろうか。

残念ながら、このテキストで扱う「保育の方法」とは、こうした“スキル”でも“ノウハウ”でもなければ、固定的保育観に基づいて対処する“ワザ”でもない。ここで言う「保育の方法」とは、保育者に求められる<4つの専門性>に基づいて、幼児を保育するための援助と方法のことである。もっと広い意味で言えば、保育者の力量として捉えることもできるだろう。

(2) 保育の方法を支える「4つの専門性」って何だろう？

第一に、「幼児を理解する力」である。そもそも幼児を保育する営みは、保育者の幼児理解に基づく行為の結果であり、保育者がその子をどのように理解するのにかよって、保育のありようは大きく異なる²⁾。たとえば、泥団子を作って遊んでいる幼児の傍らに寄り添うときに保育者は、幼児の姿を注意深く観察し、その子は今、泥団子の何に興味を持っているのか、なぜそれに興味を抱くのかなど、その子の内面を理解しようとしなければならない。ただ幼児と一緒に泥団子を作って遊ぶ保育者と、泥団子を作る幼児を傍らから理解しようと努める保育者とは、その幼児へのかかわりは大きく異なる。つまり保育の営みは、保育者の幼児理解を土台に展開されるのであり、したがって保育者の「幼児を理解する力」は、保育の方法の出発点として位置付けることができる。

第二に、「保育を計画（デザイン）する力」である。保育所・幼稚園・認定こども園などで子どもが無邪気に遊んでいる姿を見ると、ともするとそこには、保育の計画など存在しないように思われるかもしれない。しかし、決して保育所・幼稚園・認定こども園は自由気ままな保育を展開しているのではなく、幼児の生活や発達に応じた保育が計画されている。たとえば、友達とのかかわりが芽生えたと、仲間と適切なかかわりがもてるような保育を計画する、幼児の就園時間が長くなると、静と動、室内と戸外、集団と個、緊張と発散など、同じ環境の中でもマンネリ化することなく幼児が生活できるような保育を計画する³⁾など、保育の計画には重要な意味が含まれる。ただし、“計画”という「毎日の幼児の遊びや生活を計画的にやらせるの？」と感じる人もいるので、“デザイン”と表現する方が柔らかな印象を与えるだろう⁴⁾。いずれにしても、こうした保育の計画は、保育者の幼児理解に基づいて構成されるものであり、したがって「幼児を理解する力」と「保育を計画（デザイン）する力」は、相互に関連するのである。

第三に、「保育を実践する力」である。保育者が幼児を理解し、それに基づいて保育（活動内容など）を計画（デザイン）したら、次にそれを実践に移すこととなる。日々の生活の中で様々な事象に興味を抱く幼児に対して保育者は、彼

(女)らの思いを実現できるような保育を展開するのである。ただし、ここでいう「保育を実践する力」とは、必ずしも(事前の)計画通りに保育を行うことを意味しない。小学校以降の授業のように「導入」「展開」「まとめ」の流れで、教師のねらいに即して活動することが重要ではなく、保育を計画しながらも、個々の幼児の状況に即して、臨機応変な対応が求められる(まさに保育を“デザイン”するという表現があてはまるといえよう)。保育の醍醐味とは、幼児の自発的活動を重視することであり、環境を通してそれらを支えるために保育者は、その場の課題や状況を読み取りながら、適切な対応を瞬時に判断し、言葉をかけたり、モデルを示したり、見守ったりするなど、様々な援助を行う。こうした保育者の行為こそ、「保育を実践する力」である。

第四に、「保育を省察する力」である。広辞苑(第六版)によれば、省察とは「自分自身を省みて考えをめぐらすこと」と記される。つまり「保育を省察する力」とは、保育者が自分の実践を振り返り、その妥当性や是非を考える力としてとらえることができるだろう。既述した通り、幼児を保育する方法は、保育者の幼児理解に基づく計画(デザイン)と実践から見出されるものである。とはいえ、日々の生活の中で常に瞬時の判断を迫られる保育者の行為は、たとえ日頃から幼児理解に努めていたとしても、必ずしも万全というものではない。そもそも保育の営みとは、保育者にとって正しい方法や正解があるわけでもない。A君に対する適切な援助や方法が、BさんやC君にも当てはまる保証はないのである。したがって保育者は、幼児理解に基づく保育の計画(デザイン)と実践を行う一方で、一日の終了とともに自らの実践を振り返り、その妥当性や是非(自分の援助は本当にあれで良かったのか、他にもっと適切な方法はなかったかなど)を問い直すことが大切である。保育者が自分の「保育を省察する力」を携えることで、保育の最中には気付かなかったことに後から気付いたり、ああそうだったのかと分かったりすることが生まれるのである。

(3) 「4つの^{ちから}専門性」の循環モデル

ところで、製造業や建設業の世界では、生産管理や品質管理の業務を進めるために、「PDCA サイクル」と呼ばれる循環モデルに基づいていることをご存じだろうか。「PDCA サイクル」とは、Plan(計画)→Do(実行)→Check(確認)→Action(改善)の4段階の頭文字をつなげたものであり、①業務を「計画」する、②計画に沿って業務を「実行」する、③業務が計画通りに実行されているか「確認」する、④業務が計画通りに実行されていない部分を調べて「改善」という、継続的マネジメントサイクルの一つである。この4段階は順を追って遂行され、一周したら最後の「改善」が次の「計画」に活かされることが大切

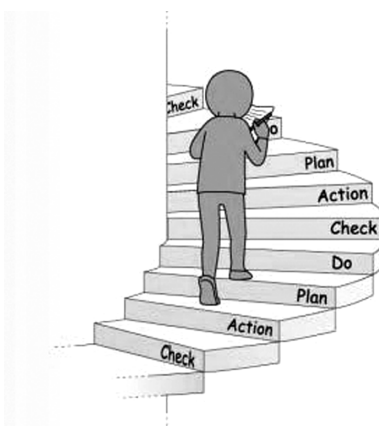
であり、螺旋を描くように一周ごとにサイクルを向上させ、継続的に業務の改善を行うものである。

今日、「PDCA サイクル」は、製造業や建設業だけでなく、小・中・高等学校の世界にも広く浸透しつつある。前記の流れを学校教育分野に即して捉えると、

① 授業を計画する、② 計画に沿って授業を実践する、③ 授業が計画通りに実践されているかを評価する、④ 授業が

計画通りに実践されていない部分を調べて改善する、となるだろう。もちろん、この4段階は順を追って遂行され、一周したら最後の「改善」が次の「授業計画」に活かされること、こうして継続的に授業の改善を行うことが大切である。

さて、本テキストの特徴は、保育の営みにおいても、こうした循環モデルに基づいて、保育方法のBrush Upを目指すことにある。ただし、本テキストが強調するのは、企業や学校教育における「PDCA サイクル」が、「授業（業務）計画」を起点に、一周することで新たな「授業（業務）計画」の向上に活かされるサイクルであるのに対して、保育の営みにおいては、「幼児理解」を起点に、一周することで新たな「幼児理解」の向上に活かされるサイクルであるということである。この点は、「PDCA サイクル」とは異なる本テキストの独自性であり、既述した「4つの専門性」に基づくことで、いわば「保育実践サイクル」としての循環モデルを提示する。具体的には、① 幼児を理解する、② 幼児理解に沿って保育を計画（デザイン）する、③ 計画（デザイン）に沿って保育を実践する、④ 実践された保育を省察する、という4つの段階が、螺旋を描くように一周ごとにサイクルを向上させることで、継続的に保育の方法をBrush Upし、ひいてはそのことが保育者の力量を高め、幼児の活動を豊かにし、保育の質を高めることにつながようとするものである。そしていうまでもなく、最後の④の「省察する」という行為が、次の①の（改めて）「幼児を理解する」という行為に活かされることが大切なのであり、この意味において、保育の方法の出発点としての保育者の幼児理解とは、常に暫定的であり、再構成し続けるものである⁵⁾。



図序-1 PDCAのイメージ図

2. 各章のダイジェスト

(1) 幼児を理解し、保育を計画（デザイン）するとは？：＜理論編＞

本テキストは、以下の3部構成で展開されている。第1部は、理論編であり、

幼児を理解する力、保育を計画（デザイン）する力について説明する（1章～3章）。

1章では、保育者が幼児を理解することの意味、保育者が幼児を理解するときの手立て、保育者の中の幼児理解のプロセス、保育実践が幼児理解から始まり、幼児理解に戻ることの重要性について理論的に解説する。

2章では、保育を計画（デザイン）することの意味、幼児理解に基づいて保育を計画（デザイン）する方法、保育の計画（デザイン）に即した環境構成について理論的に解説する。

3章では、幼児の遊びと発達について理論的に解説する。保育者が幼児を理解し、保育を計画（デザイン）するためには、日々の保育を通して、保育者が個々の幼児を理解することが前提となる。とはいえ、保育者は、幼児期の特徴や発達に関する基礎知識を身に付けておくことも大切であり、そうした知識が保育者の幼児理解を促すことも考えられる。このような観点から、本章では、幼児の遊びと発達に関する基礎知識を提示する。

(2) 保育を実践するとは？：＜実践編＞

第2部は、実践編であり、具体的な保育場面における保育者の援助と方法について、既述した＜4つの専門性＞の循環モデルに即して説明する（4章～11章）。

4章では、登降園場面における保育者の援助と保護者対応について、「幼児理解→保育計画（デザイン）→保育実践→省察」の保育実践サイクルに基づいて検討する。幼稚園や保育所における登降園場面は、家庭と園が接続する場面でもあり、したがって保育者は、幼児だけでなく、保護者とのかかわりも求められる。

5章では、幼児の遊びの発展と保育者の援助について、上記の保育実践サイクルに基づいて検討する。幼児の主体的活動としての遊びを促す保育者の役割について、「思考力の芽生え」「知的好奇心」という2つの鍵概念を中心に考える。

6章では、協同する経験と保育者の援助について、上記の保育実践サイクルに基づいて検討する。年長児の事例を基に、幼児同士が互いに遊んだり、他の幼児と試行錯誤したり、共通の目的に向かって力を合わせたりするときの保育者の役割について考える。

7章では、幼児同士のトラブルと保育者の援助について、上記の保育実践サイクルに基づいて検討する。特に本章では、オーストラリアの事例を基に比較考察することで、日本の保育の特徴や、海外から学べる視座について考える。

8章では、食育場面での保育者の援助について、前記の保育実践サイクルに基づいて検討する。「お月見だんごづくり」（5歳児）、「レストランごっこ」（3～5歳児の混合）の事例から、幼児理解に基づく保育の可能性と課題について考える。

9章では、障害児への理解と保育者の援助について、前記の保育実践サイクル

に基づいて検討する。タケルくん（3歳児）の幼稚園入園から一年間の軌跡を通して、保育者のタケルくん理解と、それに基づく援助のあり方について考える。

10章では、学びと生活の連続性と保育者の援助について、前記の保育実践サイクルに基づいて検討する。「保育における地域資源の活用」（4～5歳児の混合）、「幼児と高校生の協働制作」（4～5歳児の混合）の事例から、幼児理解に基づく保育の可能性と課題について考える。

11章では、家庭との連携と保育者の援助について、前記の保育実践サイクルに基づいて検討する。幼児理解からはじまる家庭との連携や、保育者が家庭と連携するときの幼児理解の重要性について考える。

(3) 保育を省察するとは？：＜理論編＞

第3部は、再び理論編であり、保育を省察する方法としての記録やカンファレンスについて説明する（12章～13章）。

12章では、保育における記録の意義や、様々な保育記録の方法について検討し、保育記録の目的や保育を省察するための記録のあり方について考える。

13章では、保育を省察する方法としてのカンファレンスについて検討する。個人での省察、メンタリングを通しての省察、共同での省察について考える。

では本題に入ろう。本テキストの目的は、幼児理解を起点とし、新たな幼児理解を再構成する保育実践の循環モデルの意味を読み解くとともに、幼児理解に基づく保育者の援助と方法について、個別具体的な場面に即して考えることである。

引用文献

- 1) Cherry, R., Friedman, J., Hilger, N., Saez, E., Schanzenbach, D., & Yagan, D. "How does your kindergarten classroom affect your earnings?: Evidence from PROJECT STAR", *The Quarterly Journal of Economics*, 126, 2011, pp. 1593 ~ 1660.
- 2) 河邊貴子「子どもを知る」青木久子・間藤 侑・河邊貴子『子ども理解とカウンセリングマインド』萌文書林, 2001年, 111～126頁
- 3) 森上史朗「保育の基本と計画」柴崎正行・戸田雅美編『新・保育講座 教育課程・保育計画総論』ミネルヴァ書房, 2001年, 3～17頁
- 4) 戸田雅美『保育をデザインする：保育における「計画」を考える』フレーベル館, 2004年
- 5) 岡田たつみ「『私の中のその子』とのかかわり方」保育学研究, 第43巻 第2号, 2005年, 73～79頁